

石を與へ、武功の士なり。元和二年の武功書に云ふ。舟喜治部左衛門、本國越中也。初め土肥美作方に罷有る時分、越中増山・上和田を上杉謙信被破候時、下和田の川中にて石井城助と名乗候者と鏑を爲合候。吉田助六郎と申者見候。又龍州穴水とら塚と申所にて、武部上總と申者と鏑を合せ、上總に突かれたり。其後敵退きけるをしたひ候て、なた打と申谷に於て高名仕たり。三輪次兵衛と申者見候也。又越中かふしは草と申所へ、敵働き候を鏑合せけり。安見藤左衛門と申者見候也。右三人何茂相果候へども、有澤采女可存知候。又越中岩瀬へ河田豊前働き引上候處へ、水橋の上張弓の瀬をば、萩田傳兵衛と申者取切りけるを、拙者先掛仕り敵を追立、市田と申處まで追付、與一と申者と鏑組み、與一を突伏せける處へ、宮崎矢九郎と申者參り、與一が首を我等捕り矢九郎へ渡しける時、傳兵衛もり返し、矢九郎がこむらを付候間、矢九郎を引立のけ被官共に相渡し、我等夫より市田・古館の口へ罷越候へば、富士彌九郎と申者、七・八人にて突出でけるを、彌九郎と鏑組み突伏せ、首を捕りたり。此儀河瀬喜八郎与申者有澤采女

可存知候。又長尾小四郎七月十七日に働被申をしたひ候て、水橋にて追崩し高名仕たり。覺人は大まるた、覺人はひだの者、覺人は不奉存。三人を討取候事、有澤采女可存知也。又大納言様・佐々内藏助・佐久間玄蕃・徳山五兵衛、氷見庄へ御働之時、我等傍壁共百人許、しだり尾と申所に古館有之、是へ追込まれ被攻けるを、助け間敷かと飯坂源左衛門に申候へば、目くらにて候間助け可申。たすけば其の方覺人助け候へと申に付、我等許助け候て名乗候へば、多勢參り候歎と存知候哉、其儘崩れ候時、内より罷退申を、返し候。我等殿り仕退き候處に、敵多く付候を、我等遣し鏑爲合、其間に突伏申處へ、中村三助と申者助け、敵をおひたて引揚げたり。敵多人數ゆゑ又付申すを、數度もり返し、覺人も討たせ不申、城を立退きたり。其時城より美作、(手捕り)ちやうきに水づけをいたし、いき切可申、給候へと申て越被申を、我等給へ、飯坂源左衛門・有澤采女・同右京助、木村善丞、此者共に喰はせ候。然處に諏訪の前へ敵廻候間、我等可罷出由城より被申に付、中黒兵助と申者に鐵炮爲持罷出候へば、敵多く參り、五・六間の内にて兵助が首を捕

可申といたしけるを、我等鏑を取り突拂ひ、兵助を引立退き候へば、又追つめ兵助が上へ乗りけるを突拂ひたり。敵味方草刈休申所を、大納言様初め内藏助敵味方見物被成、其より罷立、兵助を引立て首を不爲捕、門脇まで引付たり。其時付入被成候とて、門を明け不申を、城より使參り門を明け、兵助を内へ入れ、我等も内に入りたり。飯坂源左衛門・有澤采女被存知也。又越中池田と申城に、山岸門兵衛・宮崎左近兩人、須田殿より被置ける時、門兵衛心替りにて働き、此方より乗詰けるに、其儘鏑に成候時、とびの者被突殺、鬼と申者腹を突かれ倒れ申を、我等ふせぎ、鏑合せ突崩し高名仕ける。有澤采女被存知也。又越中境の城へ景勝の働き之時、町曲輪の塀を奪番に乗り取籠りける處に、敵待ちかけ組合、良久しく組合ふといへども、終に勝負不付。于時唐人式部大輔の内鏑中村と申者參り、我等弟にて有之故くれ候へと申に付、中村へ出しける。それより先がけ仕り、權平曲輪廣間の前にて高名仕り罷出候へば、其より門を立久敷持ちたり。我等首を持ち罷下り、町の外にて景勝の御目に懸候へば、一番首のよし御意被成候

て、御盃被下。此儀有澤采女被存知也。又直江山城最上へ働被申時、九月廿九日に我等強敵二三度廻りけるを心得、無二無三にかゝり、敵を追崩し、鏑下にて、我等與力ひの浦次郎左衛門と申者に首とらせたり。其時山城被申は、天下殿の足輕大將に致し候てもくるしく有間敷と被申候て、褒美として金子くれられたり。此儀は本庄主計能存知けると。按ずるに、舟喜氏は越中國土著の士にして、舟喜は舟木の假字ならんか。奈良東大寺八幡宮新造舎所藏、弘仁六年十月卅日の古文書に、越中國礪波郡杵名郷庄長船木弟虫てふ人見ね、古事記神武天皇の段に、神八井耳命者伊勢の船木の直等之祖也とあり。城戸氏系圖に、舟木甚五郎政吉者越中人、仕佐々成政而有功。天正中成政立山麓砂良々々越之時、相從者之中也。とあり。是治部左衛門の一族なるべし。治部左衛門が子孫は、舟喜幾久三郎と稱し、能登町に居住し、世々鎗術に達す。

○青木頼母傳話
頼母は、本多安房守政重の家士にて、家祿六百石を與へ、武功の士也。元和二年の武功書に云ふ。青木頼母、本國越